
モンスターハンターX

マグネシウム2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンターX

【Nコード】

N7773C

【作者名】

マグネシウム2

【あらすじ】

ある村に一人の少年が住んでいた、村が平和なせいかその少年は世界の一般常識「モンスター」「ハンター」という存在を知らなかった。しかし、ある事件をきっかけに少年は数々の事実を知るのであった…

「我」始まり」（前書き）

前も同じようなの書きましたけど、今回は書き上げます！

「我「始まり」

ある村に一人の少年が住んでいた、村が平和なせいとその少年は世界の一般常識

「モンスター」

「ハンター」という存在を知らなかった。しかし、ある事件をきっかけに少年は数々の事実を知るのであった…

《ある日》 「ふゝ、疲れたゝ」右手に斧を持って左手で額の汗を拭いているのは、先ほど紹介した少年

「ジーク」だった。父にまき割りをやれと言われやっていたのである。

「かつたりゝ。何で俺がこんな地味な仕事を…」と、愚痴を言っているると急に目の前が暗くなった

「だゝれだ」と陽気な声が聞こえた、

「……この村に若い女は一人しかいねゝじゃねゝか」軽くため息をつくと、目をおおっている手をどけて振り向いた。そこにはにこやかに笑っている女の子が立っていた。

「あちゃゝ、バレちゃた」と、茶色の長い髪をなびかせながら舌を出して頭をかきながら笑っていた。

「やつぱ「ミラ」かよ…」この子はこの村の数少ない女の子。村長の一人娘でジークの遊び相手でもある。

「で？なんかようか？」 「うん？ああ、今日収穫祭って言うのは覚えてるよね？」ジークはやつとのこと思い出したかのように

「……ああ！そんなのあつたなゝ」 「忘れないでよゝ。」 「わりわりい、それで収穫祭がどうした？」ミラは呆れた顔をして

「あのさゝ、本当に覚えて無いの？」 「収穫祭したい忘れてたw」

「……はあ」完璧に呆れはて表情ではなしはじめた

「今日の収穫祭は『ハンター』っていう職業の人たちがくるらしいよ」「はんだあ？ケルビとかアプトノスとか激しく刈る奴らか？」
「ジーク、文字間違ってるよ…『刈る』じゃなくて『狩る』だよ…」
「お！本当だ！」
「ふう…あ、それでね『ハンター』って職業はワイバーンという巨大な怪物と戦うらしよ」
ジークは興味なさげに

「へ〜」と軽く返事をした。

ザワザワ…村の中心で人たちが集まっていた。ジークは立ち上がり目を細めて

「ん〜、なんだありゃ？」

「あの人たちだよ！ハンターって！」ミラは目を輝かせて指さした。指の先には鎧を着て背中になりに大きな剣を背をつけている人や小さな剣を持った人、これまた大きな銃を背負っている人たちがいた。

「かつこいいね〜」と、ミラは喜んでいたがジークは顔をしかめて「……アイツらホントにワイバーンって言う化け物倒せるのか？」

たしかに強そうな防具や武器を持っているが、そのハンターが装備してる防具は全て新品同様にきれいだっただけだ。

「アイツら化け物と戦って無傷だったのか？」ミラは少し考えてから「多分…今日のために新しいの買ったのかな〜」「そうだといいいんだけどな…」なぜか嫌な予感がした。 《夜》

「……と、言うことでこの村に近づいてくるモンスターを討伐してくれるハンターのかたがです！」中央広場に集めた村人の前でミラの父親の村長が台の上にたち、ハンターの紹介をしていた。「…：…：なげ〜」話が始まって一分とたたずにジークはもうあきかけていた。その時村長のあがつていた台にハンターの中でもリーダーっぽいやつが台に立った。「我々が来たからにはもう大丈夫だ！」

お、おい…ハンター達逃げてったぞ…」村人の一人がそう言うときみんな後ずさりしながら

「こ、こいつどうすんだよ…」その時だった舞い降りてきた化け物は、獲物を探してるかのように首を高くして辺りを見渡しそして…ギャオオオオオオオン 化け物は急に走り出し人々に突っ込んでいった。うわぁ〜!!! く、くるな〜!!! 助けてー!!! 村人は叫びながら逃げ惑った。化け物は飛び上がり火球を吐き続けていた。ジークは我が目を疑った…数時間前までは緑の綺麗な村が、真っ赤な炎につつまれ血の臭いと人の悲鳴で溢れかえっていた。「なんなんだよこれ…」ジークは呆然と立っていた時、紅化け物はジークに向かって火球を吐いた…

「!!! しまっ…」死ぬのか…そう思った時には、体が宙に浮いていたそして勢いよく地面に背を打った。背中のは痛みはあるが焼ける痛みはない、おかしいと思いつち上がるうとしたとき、ジークの膝の上にミラが倒れていた。なぜ? そう思いながらミラを起こそうとしようとした時、ジークは分かったどうして自分が燃えなかったのか…あの時ミラが俺をかばった…ミラの背中はやけただれ、ぐつたりとしていた。

「お、おい…おい!!! ミラ!!!」 「う…ん…」 「大丈夫か…」 正直大丈夫な状態ではなかった、意識はあるものの焼けた背中はいくれてみるも無惨だった…

「ジーク…」 かすれた声でミラは喋り始めた、
「ば、馬鹿喋…」 ミラはジークの口を何とか動く右手でおおった
「ジーク話を聞いて…ゴホ 私の家あった昔凄腕のハンターが使った剣…これを使って…」 「ミラが握っている左手の袋の中には透き通るような蒼い短剣と盾が入っていた、

「お父さんに渡そうとしたんだけど私をかばって…ゴホ だ、だからあなたがこれを使って…あの化け物を…」 「分かった…分かったから!!! もう喋らないでくれ…」 それを聞いたミラは笑って
「最後まで心配してくれてありがとう…ジーク…あなたに会えて本当に良かった…ゴホ 私の初恋の相手があなたでほんとに良かった…」 ミラはジークの手の中で息絶えた、

「我」ハンターの仕事「(前書き)

連続いきます！

「我「ハンターの仕事」

う……………」気がつくのと、いつもの二階の部屋で寝ていた。酷く頭が痛い……………あれは夢だったのだろうか？俺の村にハンターが来てモンスターを倒してくれるはずが、モンスターが来た途端アイツ等は逃げ出しそして……………」

「ミラ？……………父さん…母さん！みんなは！？」その時下の階から声が聞こえた、

「ふう…やつとお目覚めか……………」聞き慣れない声と一緒に階段を登る音がした。

「だ、誰だ！！」声の主が現れた。全身赤い鎧を身にまとい、背中には巨大な剣を背負ってた。

「俺か？俺はお前の命の恩人だ」

「命の恩人？何言ってるだ、俺はお前なんかに助けてもらった覚えなんかないぞ！！」鎧の男は兜を外しテーブルに置いた。

「騒ぐな、広場にいる《レウス》が起きてしまう」しかし、ジークは男の忠告を無視し

「れうす？！なんだよそれ！？それよりみんなは？村のみんなは！？」男はベットの前に立ち背中の中を抜きジークに向けた

「聞こえなかった？騒ぐなど言っただはらずだ……………それと一つ、この村の生存者はお前以外いない」それを聞いてジークは呆然とした。あたりまえにあつた幸せ・仲間・家族をたった一晩で全て失ったのだ。ジークはなんとか口を開き話した

「……………どうして俺は生きてるんだ？教えてくれ……………」あの時たしかに自分はその化け物に向かつて突っ込んでいった、なのになぜ？男はジークに向けていた剣をしまい、椅子に座った

「いいだろう、教えてやる……………」

「俺はこの村の村長とちよつとした知り合いでな、久しぶり会おうとクエストの帰りに寄つたんだ。そしたらこのありさまだ……あるうことかレウスに突っ込んで行く馬鹿まで眼中に入ってしまった。ほつとくのもあれだったんで、仲間頼んでレウスを眠らせた。そのついでにお前にも眠ってもらつたわけだ」

「ば、馬鹿つて……」ジークは少し怒った顔をしたが鎧の男は鋭い目で睨んだ

「ああ馬鹿だ、レウス相手になんも戦略無しで突っ込むのは馬鹿以外の何者でもない。そんなことする奴はブルファンゴだけで充分だ」言い返そうとしたが、この男の言ってることは事実だ。実際この男が助けてくれなかったら、俺は死んでいただろう……

「なあ、一つ聞いていいか？さつきからあんたが言ってる《レウス》ってなんなんだ？」

「レウスは《リオレウス》というモンスターの名前の略だ。」

「レウスつて、強いのか？」

「新米にはキツイ相手だ」

「あんたはキツくないのか？」

「まあな……」ジークは腕を組んで

「だつたら倒してこいよ、広場で寝てるアイツを」

「俺一人では無理だ」ジークは呆れた顔して

「なんだよそれ、やつばお前も口ばっかか？」

「勘違いするな、ハンターとは常に4人で動くものだ、だいたい俺は人間アイツ等は化け物だ。1対1で勝てるほど甘くはない。俺はお前と違って、命を粗末にするほど馬鹿ではないんでな」何故だかコイツの言うことは説得力があるような気がして、言い返せない……そんな話したをしてみると、また階段を駆け上がる音がした……

「ういゝすつ」と陽気な声とともに階段から上がってきたのは女だった。鎧の男の仲間だろうか？しかし、この男とは違ってかわって足と腕に鉄鋼みたいな物を装備しているだけで、あとは普通の私服

を着ている。腰には短剣のようなものを装備しているだけだった

「あ、その子起きたんだ」

「まあな。それより神楽、アイツ等呼んどいたか？」神楽？この女の名前だろうか？そんなことを考えながらジークは、二人の話を聞いていた。

「うん。ゼロはもう持ち場についてるよ。けど、セバスチャンはどうだろう、少し遅れるってさ」それを聞いた鎧の男は少し考えこんだ。

「どうする？セバスチャン待つ？」神楽がそう訪ねると

「……いや、今倒す。レウスくらいなら三人で充分だ。」

「OK隊長、んじゃゼロに伝えてくるね」と言って家を出ていった。

「どれ、準備をするか……」そう言っただけをかぶり直し立ち上がった「ちよつと待ってくれ！」家から出ていこうとした鎧の男を呼び止めた。

「……なんだ？」

「俺も一緒に戦わせてくれ！頼む」

「ハンターの仕事なめるな、足手まといだ。」

「でも、俺……敵をうちたいんだ……それに、逃げてった腰抜けの奴らだつてハンターになれたんだ、俺だつて……」

「……意気込みはかう、だがそれは無理な相談だ。」

「でも……！」

「いいから……！お前は見てる。本当のハンター仕事を、戦いを」

「分かった……」その言葉を聞いた鎧の男の口から以外な一言がでた「……お前の名前は？」余りにも唐突に聞かれたので、一瞬戸惑ったが

「ジーク、ジーク・ハルス」

「……奇遇だな、俺の名前もジークだ。ジーク・ニコル」それだけを言つと外に出ていった。外に出ると、神楽が扉の横に壁にもたれて

待っていた。

「悪い、待たせたな。」

「んにゃ、別にいいよ〜。」と言うと、神楽は微笑した。ジークが不思議に訪ねた

「？、どうした？」

「ジークが名前教えるなんて珍しいじゃん」それを聞くとジークは遠い目をした。

「…アイツは俺に似ている。一瞬で幾つもの大切な物が消えた辛さ、何も出来なかった自分の無力さが今アイツを苦しめている。」頭の後ろで腕を組

「へ〜。で、手をかすつもり？」ジークは首を振り

「いや、これはアイツが解決しなければならぬ。それより気になつたことがあるんだ。」神楽は不思議そうにジークの顔を覗きこんだ

「どつたの？」

「普通モンスターは滅多なことで村を襲ったりはしない。それに、襲う理由がない。ここの村の周りにはケルビヤアプトノスが豊富にいる、それなのになぜ…」神楽もジークと一緒に考えていたが、すぐに考えるのを止めて。

「あ〜んも〜。考えごとはアイツを倒してからでいいじゃん〜」ジークは、ふうとため息をつき

「そうだな、それじゃ始めるか。ゼロ頼む！！」ジークが叫ぶと、どこからともなく弾がとんできて、レウスの背中に直撃した。あまりの痛みにレウスは起きだした。ギャオオオオオン！！と、声を轟かせた。

「やっぱり迫力だけは、いっちょまえにあるね〜」と、余裕の表情で挑発を始めた。

「来てみるバーか！」神楽はレウスの前で飛び跳ねたり、角笛を吹いた。レウスは迷うことなく神楽の方を睨み突進体制に入り、足で大地を蹴ろうとしたとき

「はい残念、ドツカ〜ン」なんとレウスの足元には落とし穴が仕掛けてあった。

「それじゃあ、いくよ!!!」かけ声と同時に、落とし穴にはまっているレウスめがけて常人とは思えないスピードで、レウスに近づいた。

「韋駄天の神楽ちゃんをなめんなよ!!!」腰から抜いた、細い短剣で次々とレウスの頭や翼爪を破壊していった。レウスが畏から抜け出した頃には、体全体がボロボロになっていた。

「ジーク、あとはよろしく〜 アタシは得意のナイフで援護するから〜」

「了解だ」そう言うと、ジークは背中中の剣を抜いた。驚いたことにあるうことが巨大なあの剣を片手で持っている。

「ゼロ、神楽、麻痺を頼む」それを聞いた神楽は腰についでる袋から、小さなナイフを五・六本取り出し。

「OK〜。くらえ!!!」と、レウスに投げた。また、別の方向からも黄色い閃光の弾が何発もとんできて、レウスに全弾命中したとたん、レウスは動かなくなった。

「今だよジーク!!!」神楽が叫ぶと同時にジークは走り出した。レウスの正面に立ちそして、巨大な剣をまるで短剣のように軽々と何回も頭中心に振り下ろした。麻痺が切れ立ち上がったが、流石に体力の限界がきて崩れるように倒れた

《家の中》 家の中にいるジークは声が出なかった。初めて見た腰抜けハンターとはまるで違う。鬼神のごとく強いハンターが目の前にいた。その時初めて分かった、これが本当のハンター…。『モンスターハンター』なんだって事が…………… 《村の広場》

「さっすが!ジーク!!!あんたがいると楽だわ〜 あんな芸当ジークにしかできないよ」ジークは剣を戻し

「こんなこと力さえあれば誰でも出来ることだ…」

が！！」

「カグラさん、アナタ細カイ事気ニシ過ギヨー！」神楽とセバスチャンが言い争いをしているのをジークは無視し、倒れているジークに

「ほら、さつさと立て。セバスの一撃でほぼ瀕死だ。はやく殺らな
いと死んでしまつぞ」それを聞いたジークはすぐに立ち上がり、剣
を握りなおした。剣を振りかざしそして、

「これで、これで終わりだああ！！」剣はレウスの頭に突き刺さつ
た…………ジークは自分でも気づかない内に泣いていた。神楽とセバ
スチャンその姿を見て騒ぐのを止めた。ジークは黙って見ていた。

「もし、もしも村に来たハンターがアンタ達だったら…………」ジーク
は涙を拭いながら言った。遠くで見ていたジークは、

「…お前、強くなりたいか？」と、言い放った。

「え？」驚いたような顔で、ジークを見つめた。

「今回の騒動は、おかしな事が多々ある。この事件、もしかしたら
裏で糸を引いてる奴がいるかもしれない。そいつ等を見つけ出した
時、そいつ等に復讐できるだけの力は必要だろ？」

「で、でもどうやって…」ジークは背中中の剣を抜き泣いているジーク
に向けた

「俺が鍛えてやる。だが、妥協やあまい修行は一切しない。それで
いいならついて来い」ジークは涙を拭き、

「よろしくお願いします！」と、お辞儀をした。剣をしまい

「そうか。神楽、セバス俺はしばらくチームから抜ける。」神楽と

セバスチャンは、

「ok！早めに帰って来てね。」

「イエッサー！ボス！！」と言い、二人は町を出ていった。

「そうだ、俺達の名前は一緒に面倒だ。俺のことは、ニコルと呼べ」
ジークは笑って

「了解！」と、言って二人も村を出て行った

三我「旅立ち」

『《????》真つ暗な部屋の中心に明かりがあり、そこに数人の人と椅子に座る男がいた。

「……で、あの村は潰してきたか？」椅子に座っている男が部下？のような者に訪ねた。

「はっ！昨夜、レウスにあの村に放ってきました」男は不適な笑いをした。が、その時奥の方から誰かが走ってきた。

「た、大変です！！レウスを回収しに行きましたら、倒されておりました！！」椅子に座っていた男は、驚いた表情で

「ば、馬鹿な！？あんな村に何が出来る！ハンターを雇ったとしても、大したハンターなど雇えぬはずだ！！」すると、報告をした男が

「そのことなんですが…あくまで聞いた話ですが、レウスを送った次の日、村の方角から『サイレント・キル』を見たそうです。」

椅子の近くにいた男が

「あいつ等じゃない？俺達の邪魔するのアイツ等くらいしかないでしょ？」それを聞いた椅子の男は、怒り狂った顔をして

「またアイツ等かあ！！我々の邪魔ばかりしておつて！！」報告をした男はさらに話し続けた

「それと…まことに申し訳ないのですが…蒼剣が見つかりませんでした…それと、見間違いかもしれませんが『ジーク』を見かけたのですが、子供と一緒にいました。その子供が蒼い剣を腰につけていたんです」椅子の男は考えこみ

「……ダメ元で、調べてみるか…。そのガキの顔は覚えているな？」
「はっ！」男は立ち上がり

「コイツと『雷帝のセレノス』を向かわせる！」そう言い残すと、男とその周りいた者たちは部屋からでていった

『《あれから三年後の密林》一人のハンターが、密林のど真ん中で立っていた。赤い鎧を身にまとい、腕を組みじっとしていた。男は急に背中 of 太刀を握り、つぶやいた

「…くる！」すると、木々が揺れ空からピンク色の大怪鳥が男めがけて、下降してきた。剣を抜いた男は高速で剣を振り、怪鳥の両羽を切り落とした。怪鳥は地面に転げ落ち、あまりの痛みへのたうち回っていた。なんとか立ち上がり逃げようとしたとき、男は怪鳥の前に立ち体を一突きした。

「ミッシェンコンプリートだ」怪鳥から、剣を抜いた。怪鳥はすでに息絶えていた。すると、後ろの方から拍手をしながら近づいてくる音がした。

「流石だね」現れたのは、神楽だった。男は剣をしまい、振り向いた

「なぜここにるのが分かった？」神楽は、ニコツと笑い

「あなたの師匠に聞いてきたんだよ」ふうとため息をつき、兜を外した。

「しっかし、変わったね」。ちよつと前はランポス倒すのにも手こずっていたのに。成長したね。『ジーク』。『そう、その男は三年前、リオレウスによって壊滅させた村のただ一人の生き残り、泣き虫ジークであった。今では身長も伸び三年間敵しい稽古に明け暮れたおかげで、髪は伸び見方を変えると女に間違えてしまううほどであった。

「…報酬貰いに帰るか」そう言うと、その場をあとにした。神楽はふうとため息をした

「アイツ、剣の腕だけじゃなくて、目つきや口調まで『ニコル』に

似てきやがった……」神楽は疲れた顔でジークについて行った。《村の出口》村に帰ったジークは、休む間もなく

「話がある」と言ってニコルと神楽を呼びつけた

「何か用？」神楽は、いきなりの呼び出しに不思議を隠せなかった。一方ニコルは、黙ったまま立っていた。ジークは

「俺、この村を出ようと思ってるんだ。もう、村を出る準備も出来た。三年間も世話してもらって悪いんだけどさ……俺もある程度強くなった。だから……俺みたいな人達がでないように……」神楽は、軽くため息をすると

「あんたね、自分で決めた事を私たちが止める権利なんかないのよ。それがしたいなら、精一杯やってきな！」そう言うと、ニコツと笑いジークの肩を軽く叩いた。ニコルは、後ろを向き

「神楽の言うとおりだ。そんなことでわざわざ呼ぶな。」ジークは少し寂しい顔をして

「そっか、それじゃあ行くな。………今までありがとな」ジークが荷物を背負い、村から出ようとしたとき

「………気をつけるよ」ニコルは、振り向かずつぶやいた。ジークはその一言には気づかず出てった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7773c/>

モンスターハンターX

2010年10月13日08時24分発行